

自我同一性に関する日韓大学生の比較

水野 正憲 ・ 李 正姫*

水野が作成した「社会性確立」と「自我確立」を測定する質問紙「自我同一性パターン尺度 (IPS)」と、それを李が韓国語に翻訳した質問紙 (IPS-K) を用いて、日本と韓国の大学生について自我同一性のあり方について比較をおこなった。

両国のデータを因子分析した結果、第1軸が「自我確立」、第2軸が「社会性確立」とみなせる同じような因子構造が確認できた。クラスター分析した結果、日本のデータは「自立」「自己信頼」「社会的責任感」「積極的社会志向」のクラスターに、韓国のデータは「自立」「自己信頼」「社会的役割取得」「調和的社會志向」に分かれた。両国大学生の平均点を比較した結果、「社会性確立」「自我確立」とも韓国の大学生のほうが有意に得点が高かった。

Keywords: 自我同一性, 社会性確立, 自我確立, 大学生, 日本, 韓国

目的

自我同一性 (Ego Identity) の確立は青年期における重要な発達課題である (Erikson, E.H. 1963)。水野は「自我同一性」を「社会性確立」と「自我確立」という自我機能の2側面を統合した概念としてとらえ、研究を進めてきた (水野正憲 1998, 1999, 2000, 2001, 2003, 2006)。ここでは「社会性確立」を「社会の中での自分の位置づけを自覚し社会における自分の役割を引き受けようとする事」、「自我確立」を「自分としての連続性や自分が自分であるということに確信が持てること」と操作的に定義している。

「自我同一性に関する日中大学生の比較」において、日本と中国の大学生について「自我同一性パターン尺度 (IPS)」を用いた比較をおこなった (水野, 2006)。今回は日本の大学生と韓国の大学生の比較をおこない、両国文化の違いが自我同一性確立に与える影響について考察するのが本研究の目的である。

方法

水野 (1998) で作成された30項目からなる「自我同一性パターン尺度 (Identity Pattern Scale, 略してIPS)」とそれを李が韓国語に翻訳した質問紙 (IPS-K) を用いて、両国大学生の自我同一性について比較検討した。「自我同一性パターン尺度IPS」は「社会性確立」と「自我確立」という自我機能の2側面をとらえた尺度であるが、「社会性確立」は社会との関わりをプラスの方向でたずね、「自我確立」は自分に確信が持てないというマイナスの方向でたずねた。「社会性確立」は社会に対して肯定的に関わっていくという傾向をもつことを確認するというたずね方をし、「自我確立」は自分に対する確信のなさを否定することで自分への確信を確認するというたずね方をしている。

調査対象は日本の大学生 (男子145名, 女子209名, 性別不明2名, 計356名) と韓国の大学生 (男子190名, 女子194名, 計384名) である。

岡山大学大学院教育学研究科教育心理学講座 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

*岡山大学大学院社会文化科学研究科博士課程 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

Ego Identity of Japanese Students and Korean Students

Masanori MIZUNO and Jung-hui LEE *

Division of Educational Psychology, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

* Graduate School of Humanities and Social Sciences (Doctor's Course), Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

本研究は日本と韓国の大学生について、両国文化による違いを全体として比較するため、性差は考慮せずに男女込みで分析することにした。

「自我同一性パターン尺度」IPS と IPS-K の因子構造を見るために、主成分分解による因子分析をおこない2因子までをもとめ Varimax 回転をする。次にクラスター分析によって、各項目のまとまりについて、日韓を比較し検討する。

日韓の大学生の自我同一性を比較するために「社会性確立」「自我確立」の得点および各項目の得点について、平均値の差の検定をおこない、項目ごと

に両国大学生の違いを検討する。さらに差の大きかった項目を取り上げ回答の分布について考察する。

結果と考察

日本語の質問紙「自我同一性パターン尺度(IPS)」と韓国語の「自我同一性パターン尺度 (IPS-K)」の因子構造を見るために、主成分分解による因子分析をおこない2因子までをもとめ Varimax 回転をした結果が表1であり、その結果をグラフで示したのが図1と図2である。

表1 「自我同一性パターン尺度」の因子分析 (Varimax 回転後の因子負荷量) 日本的大学生 (N=352) と韓国的大学生 (N=368)

項 目	日本		韓国	
	F1	F2	F1	F2
(01) 将来に希望をもっている	-0.384	0.471	-0.238	0.498
(03) 規則正しい生活をしている	-0.130	0.163	-0.283	0.344
(05) 人の先頭にたって行動する	-0.401	0.302	-0.247	0.343
(07) 何でも手がけたことは最善をつくす	-0.050	0.667	-0.257	0.624
(09) 努力をしてやりとげようとする	0.034	0.564	-0.091	0.491
(11) 何でも自分から進んでやろうとする	-0.294	0.512	-0.461	0.369
(13) 集まりのとき、みんなを楽しませようと努力する	-0.065	0.411	-0.109	0.401
(15) 社会のためにつくそうという気持ち強い	-0.079	0.494	-0.013	0.481
(17) 人に迷惑をかけないよう、考えて発言している	0.179	0.403	0.103	0.478
(19) 仲のよい友だちが多い	-0.269	0.456	-0.350	0.382
(21) 強制されたことでも、いっしょうけんめいやる	0.118	0.511	0.163	0.482
(23) いやな仕事でも最後までやりとおす	-0.010	0.637	0.009	0.433
(25) やるべきことは決められた日までにやってしまう	-0.122	0.436	-0.228	0.379
(27) 自分の責任はきちんとはたす	-0.079	0.639	-0.274	0.536
(29) 人の立場を考えて行動する	0.009	0.591	0.114	0.576
(02) だれかに頼ろうとする気持ち強い	0.426	-0.237	0.497	0.121
(04) 自分の考えを人からけなされそうな気がする	0.630	-0.065	0.570	-0.199
(06) 仲間はずれにされそうな気がして心配である	0.527	-0.105	0.496	-0.100
(08) 決心したあともよくぐらつく	0.604	-0.043	0.583	-0.025
(10) 目標が高すぎて失敗したと思うことがよくある	0.332	0.099	0.387	-0.049
(12) ひとりで初めてのことをするのが心配である	0.634	-0.095	0.663	0.084
(14) 今、自分が本当にしたいことがわからない	0.492	-0.123	0.474	-0.222
(16) 困難に直面するとしりごみしてしまう	0.610	-0.180	0.543	-0.182
(18) 内気なので自分を主張できない	0.612	-0.148	0.567	-0.152
(20) くよくよ心配するたちである	0.677	0.093	0.670	0.141
(22) うわさを気にするほうである	0.540	0.188	0.460	0.292
(24) 自信がないのであきらめてしまうことが多い	0.608	-0.233	0.666	-0.213
(26) 今の自分は本当の自分でないような感じがする	0.493	0.008	0.456	-0.178
(28) 自分が見じめだと感じるが多い	0.710	-0.021	0.680	-0.103
(30) ときどき自分は役にたたない人間だと感じる	0.671	-0.045	0.656	-0.212
固有値	5.606	4.025	5.591	3.617
寄与率(%)	18.685	13.418	18.635	12.057

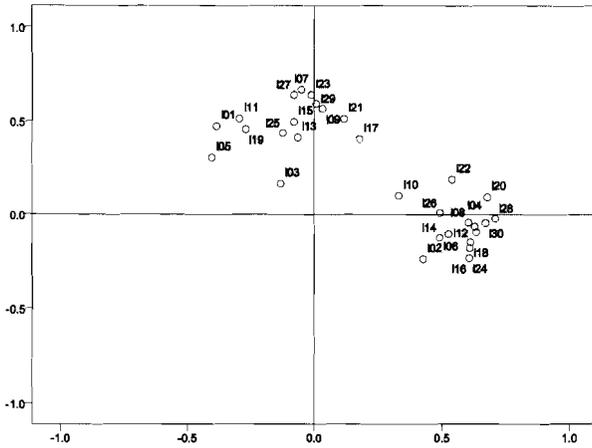


図1 「自我同一性パターン尺度」の因子分析 (日本の大学生) Varimax 回転後

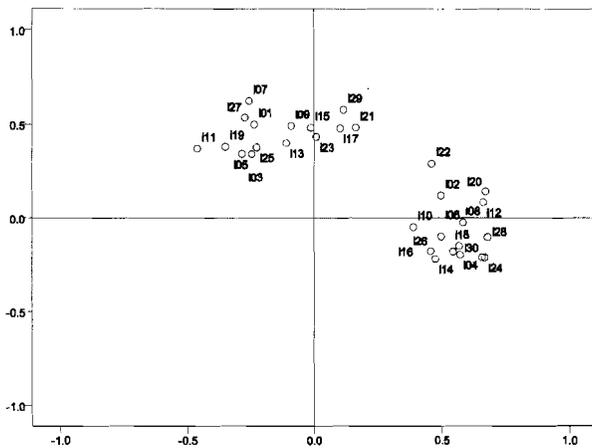


図2 「自我同一性パターン尺度」の因子分析 (韓国の大学生) Varimax 回転後

日本の大学生の「自我同一性パターン尺度」の因子分析結果を図示した図1を見ると、偶数番号が横軸、奇数番号が縦軸にまとまっていることが見てとれる。偶数番号は「自我確立」の項目、奇数番号は「社会性確立」の項目なので、横軸（第1因子）は「自我確立」因子、縦軸（第2因子）は「社会性確立」因子と考えられ、日本の大学生データにおける因子構造は2因子でかなりすっきりとまとまっているといえよう。表1によって細かく見ていくと、項目番号5「人の先頭にたつて行動する」は「社会性確立」の項目であるが「自我確立」への負荷のほうはやや大きく、項目番号3「規則正しい生活をしている」はどちらの因子への負荷も大きくなかった。

韓国の大学生の「自我同一性パターン尺度」の因子分析結果を図示した図2を見ると、日本の大学生の場合と同様に、ほぼ偶数番号が横軸、奇数番号が縦軸にまとまっていることがわかる。偶数番号は「自我確立」の項目、奇数番号は「社会性確立」の項目なので、横軸（第1因子）は「自我確立」因子、縦軸（第2因子）は「社会性確立」因子と考えられ、

韓国の大学生データにおける因子構造は日本の大学生の場合と同様に2因子でかなりすっきりとまとまっているといえよう。表1によって細かく見ていくと、項目番号11「何でも自分から進んでやろうとする」は「社会性確立」の項目であるが「自我確立」への負荷のほうはやや大きく、「社会性確立」の他の項目の因子負荷量が日本の大学生の場合よりも小さめであった。

全体的に見ると日本の大学生と韓国の大学生の傾向は似ているが、項目間の関連について詳しく検討するために、「自我同一性パターン尺度」のクラスター分析(平方ユークリッド距離を用いたWard法)をした結果が、図3と図4である。

図3と図4から、日本の大学生、韓国の大学生とも、大きく「社会性確立」と「自我確立」の2つのクラスターに分かれていることが分かる。奇数の番号が「社会性確立」、偶数の番号が「自我確立」の項目であるから、両国のデータともきれいに二分されている。

さらに偶数番号の「自我確立」の項目は、両国とも同じ項目が二分されている。このクラスターは水野（2006）の日本の大学生の結果と同じまとまり方をしたので、大枠としてはそのときと同様なものと考えことにした。「だれかに頼ろうとする気持ちが強い」「ひとりで初めてのことをするのが心配である」「決心したあとよくぐらつく」「くよくよ心配するたちである」「うわさを気にするほうである」の5項目がまとまったクラスターは、依存性のクラスターと考え、方向を「自我確立」の方向にして「自立」と名付けた。次のクラスターは「困難に直面するとしりごみしてしまう」「自信がないのであきらめてしまうことが多い」「内気なので自分を主張できない」「ときどき自分は役にたたない人間だと感じる」「目標が高すぎて失敗したと思うことがよくある」などの項目がまとまっているので自信欠如のクラスターと考え、方向を「自我確立」の方向にして「自己信頼」と名付けた。以上から、「自我確立」のクラスターは「自立」と「自己信頼」のクラスターから成り立っているとまとめられよう。

奇数番号の「社会性確立」の項目は、日本と韓国でクラスターのまとまり方がかなり異なっているので、国別に考察していく。

日本の大学生の場合、「いやな仕事でも最後までやりとおす」「自分の責任はきちんとはたす」「強制されたことでも、いっしょうけんめいやる」「人に迷惑をかけないように、考えて発言している」「将来に希望をもっている」「努力をしてやりとげるとな仕事をしたい」「集まりのとき、みんなを楽しく

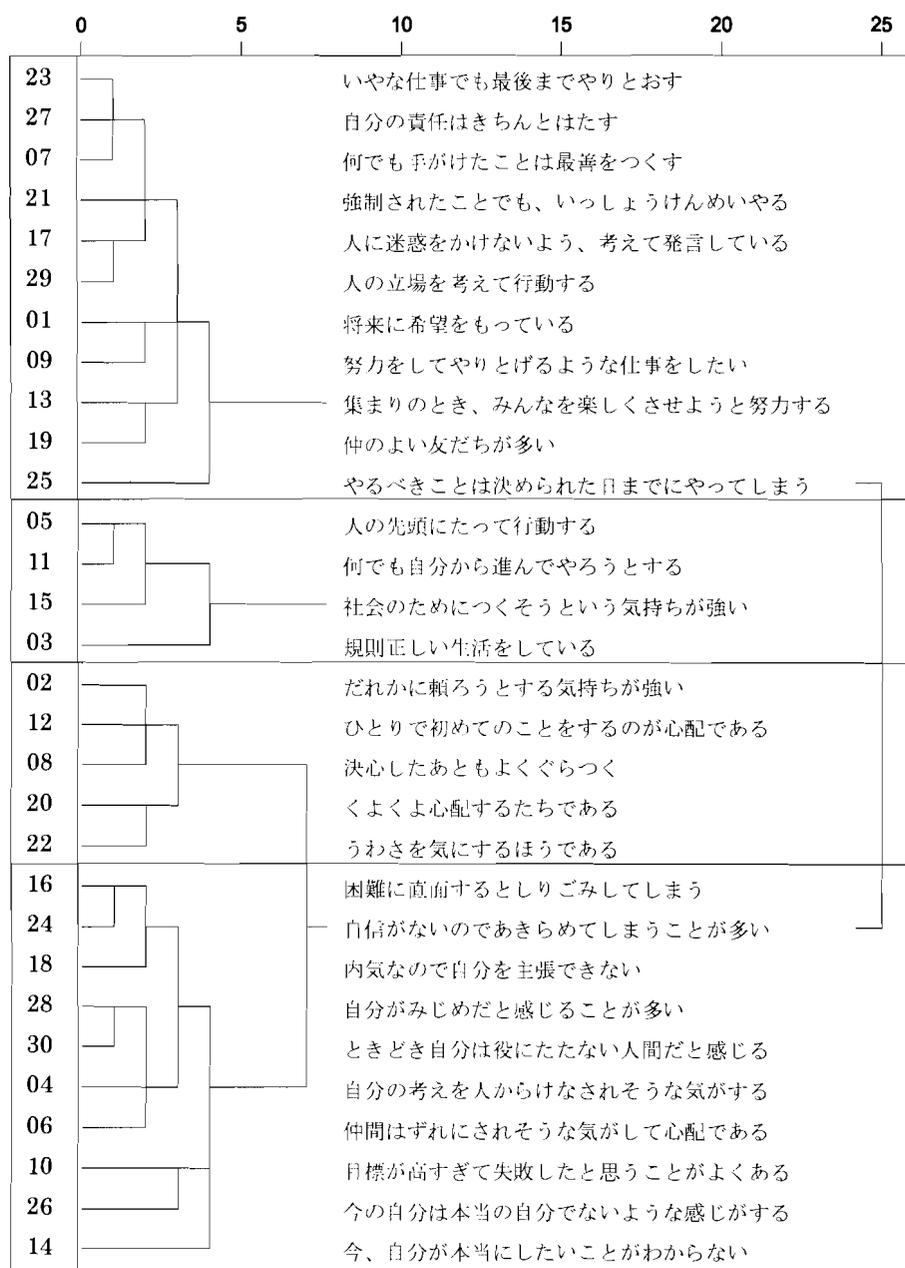


図3 「自我同一性パターン尺度」のクラスター分析（日本の大学生 N=352）

させようと努力する」「やるべきことは決められた日までにやってしまう」などの項目が大きなクラスターを形成している。項目の内容からこのクラスターは「社会的責任感」のクラスターと考えられる。小さいほうのクラスターは「人の先頭にたって行動する」「何でも自分から進んでやろうとする」「社会のためにつくそうという気持ち強い」「規則正しい生活をしている」の項目から成り立っているので、「積極的社会志向」のクラスターと考えられる。

韓国の大学生の場合、「人に迷惑をかけないよう、考えて発言している」「人の立場を考えて行動する」「将来に希望をもっている」「努力をしてやりとげるような仕事をしたい」「社会のためにつくそうという気持ち強い」が一つのクラスターを形成して

いる。社会のためにつくそうとする志向性が、努力をしてやりとげる仕事や人の立場を考えると結びついており、「社会的役割取得」のクラスターと考えられる。もう一つの大きいほうのクラスターは「人の先頭にたって行動する」「何でも自分から進んでやろうとする」「規則正しい生活をしている」という日本の大学生では「積極的社会志向」のクラスターと名づけた中の項目と、「強制されたことでも、いっしょうけんめいやる」「いやな仕事でも最後までやりとおす」「何でも手がけたことは最善をつくす」「自分の責任はきちんとはたす」「やるべきことは決められた日までにやってしまう」というような社会的責任感の項目から成り立っているので、「調和的社会志向」のクラスターと考えられる。

自我同一性に関する日韓大学生の比較

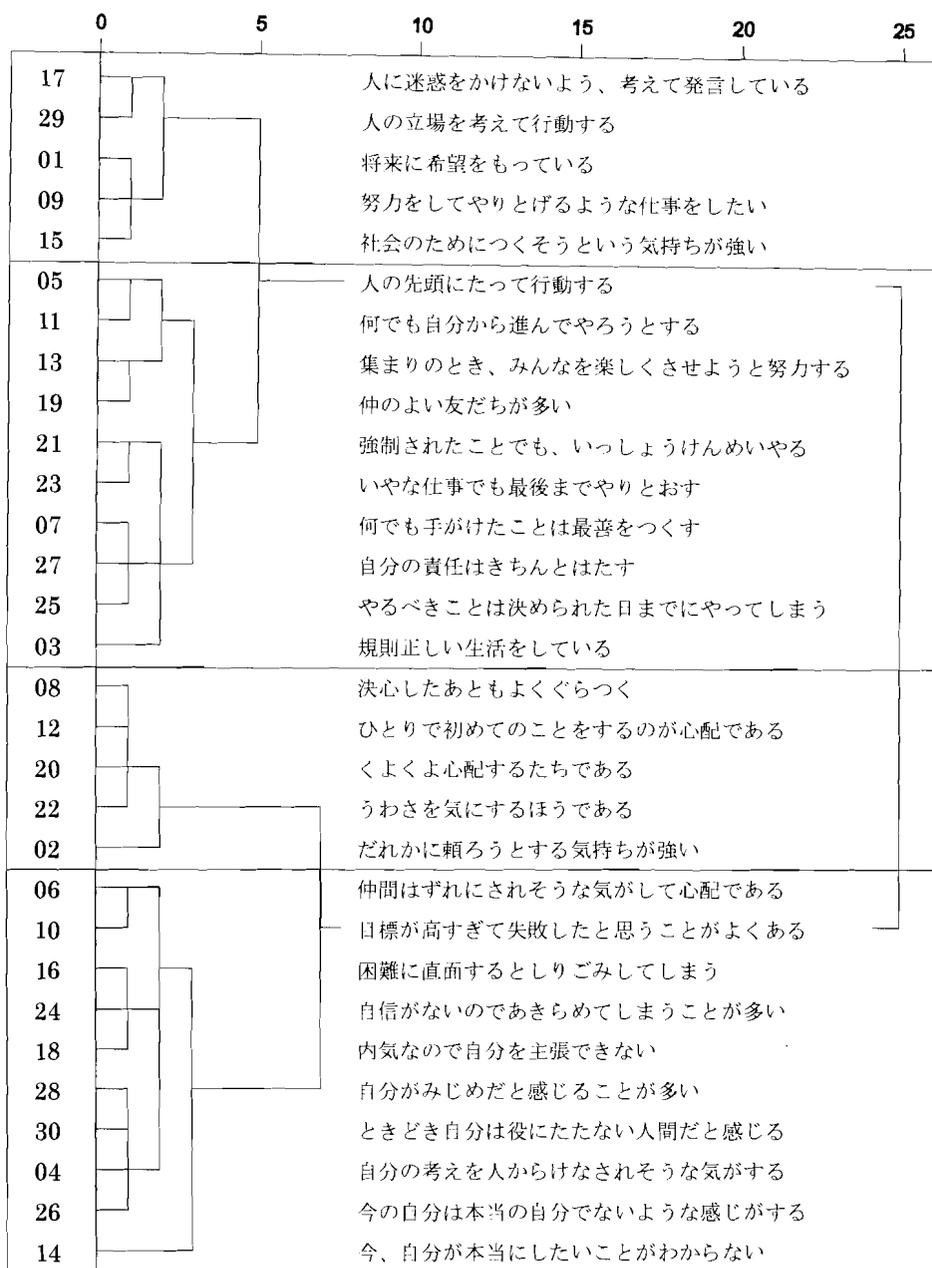


図4 「自我同一性パターン尺度」のクラスター分析（韓国の大学生 N=368）

日本の大学生と韓国の大学生のクラスター分析の結果を比較することで、以下のような差異が浮かびあがってきた。

「自我確立」のクラスターは両国の大学生とも「自立」と「自己信頼」のクラスターから成り立っており、ほぼ同じようなまとまり方をしている。自我を確立するために、日本でも韓国でも「自分自身を信頼して自立するという構え」が重要であることがうかがえる。

これに対し「社会性確立」のクラスターは、日本の大学生と韓国の大学生では異なったクラスターとなった。日本の大学生の場合は「社会的責任感」のクラスターと「積極的社会志向」のクラスターから成り、韓国の大学生のばあいは「社会的役割取得」

のクラスターと「調和的社会志向」のクラスターから成り立っている。社会性を確立するために、日本では「社会的責任感を自覚するとともに、自分から進んで社会のためにつくそうという構え」が見られるのに対し、韓国では「社会的役割を引き受け、積極的に社会と関わり、自分の責任を果たそうという構え」が見られる。

両国大学生の自我同一性について、より詳細に検討するため、「自我同一性パターン尺度」の各項目について、平均値をt検定によって比較検討する。日本の大学生の各項目の平均値と標準偏差、韓国の大学生の各項目の平均値と標準偏差、t値、項目内容の順に示したのが、表2と表3である。どちらの

表2 日韓大学生の「社会性確立」項目平均の比較

項目	日本大学生	韓国大学生	t	項目内容
1	3.39(1.014)	4.28(0.888)	-12.688***	将来に希望をもっている
3	2.51(1.158)	2.88(1.033)	-4.543***	規則正しい生活をしている
5	2.59(1.029)	3.11(0.958)	-6.971***	人の先頭にたって行動する
7	3.46(0.875)	3.64(0.808)	-2.836**	何でも手がけたことは最善をつくす
9	3.84(0.937)	4.22(0.800)	-5.925***	努力をしてやりとげようとする
11	2.84(0.930)	3.31(1.091)	-6.420***	何でも自分から進んでやろうとする
13	3.37(1.052)	3.44(1.013)	-1.025	集まりのとき、みんなを楽しくさせようとする
15	2.92(0.922)	3.99(0.856)	-16.300***	社会のためにつくそうという気持ち強い
17	3.51(0.918)	3.91(0.873)	-6.064***	人に迷惑をかけないよう、考えて発言している
19	3.40(0.925)	3.61(0.914)	-3.012**	仲のよい友だちが多い
21	3.44(0.940)	3.51(0.937)	-1.102	強制されたことでも、いっしょうけんめいやる
23	3.68(0.830)	3.22(0.903)	7.138***	いやな仕事でも最後までやりとおす
25	3.34(1.156)	3.59(0.886)	-3.275***	やるべきことは決められた日までにやってしまう
27	3.79(0.855)	3.77(0.802)	0.346	自分の責任はきちんとはたす
29	3.71(0.816)	3.98(0.775)	-4.502***	人の立場を考えて行動する
	49.51(7.835)	54.09(7.463)	-8.153***	「社会性確立」得点

表においても、左側の数値が平均値、かっこ内の数値が標準偏差、t値とその危険率 (**が1%, ***が0.1%), という形で示してある。

両国大学生の「社会性確立」各項目の平均値と「社会性確立得点」についてt検定の結果を示したのが表2、「自我確立」各項目の平均値と「自我確立得点」についてt検定の結果を示したのが表3である。

まず表2の「社会性確立得点」を見ると、日本の大学生は49.51、韓国の大学生は54.09であり、危険率0.1%以下で有意に韓国の大学生のほうが「社会性確立得点」が高い。

さらに表2より、危険率1%以下で有意差があった項目について見ると、項目番号23「いやな仕事でも最後までやりとおす (t=7.138)」だけが日本の大学生のほうが高得点だった以外は、すべて韓国の大学生のほうが得点が高く、社会性確立の傾向が強いことがうかがえる。韓国の大学生のほうが高得点の項目のうちで、t値の大きな項目を見ると、「社会のためにつくそうという気持ち強い (t=16.300)」「将来に希望をもっている (t=12.688)」「人の先頭にたって行動する (t=6.971)」「何でも自分から進んでやろうとする (t=6.420)」などである。韓国の大学生では「将来に希望をもっている」の平均が4.28で、「社会性確立」項目の中でもっとも高いのに対し、日本の大学生では「将来に希望をもっている」の平均が3.39で「社会性確立」15項目の中で9番目である。また、日本の大学生と韓国の大学生でもっとも差が大きかったのが「社会のためにつくそうという気持ち強い」であり、日本の大学生の将来への希望の小ささが社会への貢献意欲を損なっているように思われる。青年にとって希望

とは社会へ向かうときの意欲の基盤である。

このことについて詳しく見るために「将来に希望をもっている」への回答分布を日本の大学生と韓国の大学生で比較したのが、図5である。図5から図10までの帯グラフは、上の帯グラフが日本の大学生、下の帯グラフが韓国の大学生の回答で、左から「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「かなりあてはまる」「非常にあてはまる」という回答の割合を示している。

図5を見ると、日本の大学生では「将来に希望をもっている」に「非常にあてはまる」または「かなりあてはまる」と回答した割合が47%であったのに対し、韓国の大学生では82%であった。さらに日本の大学生では「まったくあてはまらない」つまり「まったく将来に希望を持っていない」と回答した人が4%いたが、韓国の大学生では0%であった。「あまりあてはまらない」も含めると、日本の大学生では将来に希望がもてない人の割合が17%になるが、韓国の大学生では5%である。この結果は、現代日本における青年の置かれている状況にかかわる重要な問題であるように思われる。以前、日本の大学生と中国の大学生について、今回と同じ質問紙で調査したときにも、日本の大学生の場合、希望がもてない人の割合が18%と、今回とほぼ同様な傾向を示していた(水野, 2006)。大学生という比較的恵まれた位置にある彼らにおいても2割近くが将来に希望がもてないと感じているのである。日本の大学生は韓国の大学生と比較しても、希望をもちにくい心理的状况にあることを示唆している。

次に、社会へのコミットメントをたずねている「社会のためにつくそうという気持ち強い」という項

目への回答分布を示したのが、図6である。

図6から、日本の大学生では「社会のためにつくそうという気持ちが強い」という項目に「非常にあてはまる」「かなりあてはまる」と回答した割合が24%であったのに対し、韓国の大学生では76%と3倍強である。「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」と回答した割合が、日本の大学生では30%、韓国の大学生では5%と大きな開きがあった。日本の大学生の場合「どちらともいえない」という回答の割合が47%と半数近くを占めている。韓国の大学生では19%と2割弱である。日本の大学生においては、韓国の大学生と比較すると社会へのコミットメントの低さが際立っている。正社員の数が減り、大学生にとって就職活動の負担が増大してきて、社会のためにつくすというより、まずは自分のことという傾向が強くなっているように思われる。正社員としての就職が困難、ワーキングプアなど若年労働者の低賃金化など、日本の大学生にとっての

社会環境が厳しくなり、経済的自立の困難度が増している。山田は「今、この家庭と学校という保護された社会、楽が許される社会と、現実の実社会のギャップがますます広がっている。(中略)そのギャップに耐えられない人は、とりあえず社会に出ることを先延ばしにする(山田, 2004, P214)」と述べている。日本の青年が自立する時期が遅くなっている原因の一つとして、社会にコミットし責任を引き受けるという「社会性確立」が困難になっていることが考えられる。

日本の大学生のほうが韓国の大学生よりも「社会性確立」の項目で有意に平均点が高かったのが「いやな仕事でも最後までやりとおす」である。この項目に対する回答傾向の差異を見るために、両国の大学生の回答分布を帯グラフで示したのが、図7である。

図7から、日本の大学生では「いやな仕事でも最後までやりとおす」という項目に「非常にあてはまる」「かなりあてはまる」と回答した割合が61%で

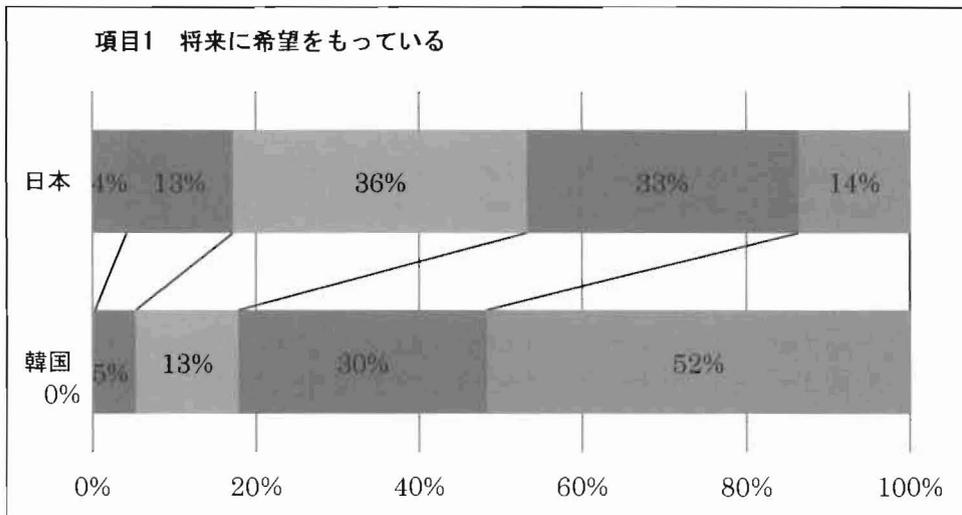


図5 日韓大学生の「将来に希望をもつ」の割合

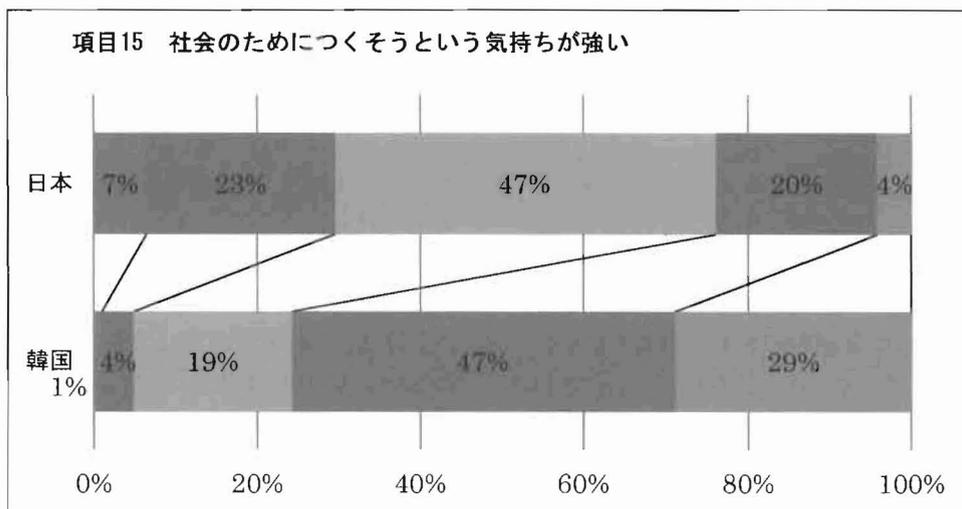


図6 日韓大学生の「社会のためにつくす」の割合

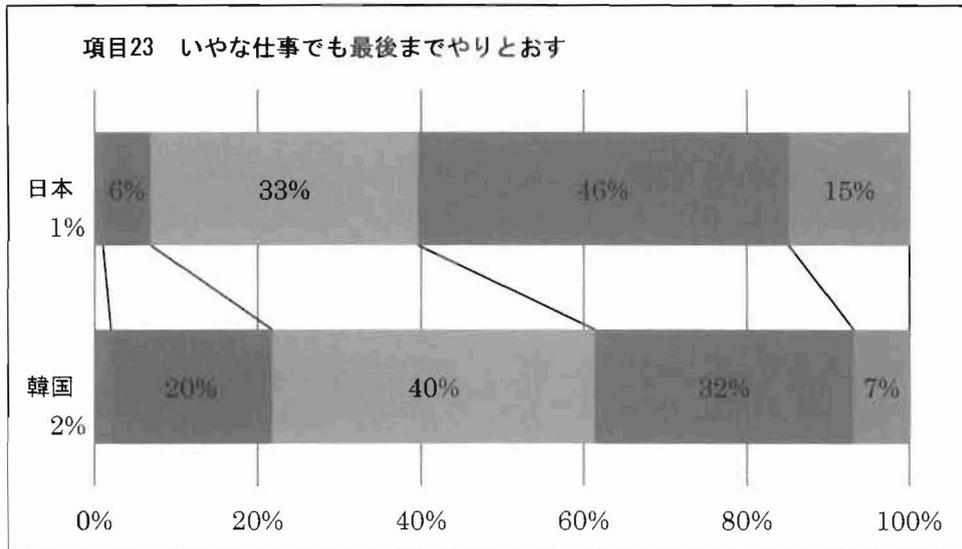


図7 日韓大学生の「いやな仕事でも最後までやる」の割合

表3 日韓大学生の「自我確立」項目平均の比較

項目	日本大学生	韓国大学生	t	項目内容
2	3.23(1.024)	3.02(1.028)	2.788**	だれかに頼ろうとする気持ちが強い
4	3.04(1.009)	2.45(0.901)	8.264***	自分の考えを人からけなされそうな気がする
6	2.89(1.071)	1.97(0.959)	12.274***	仲間はずれにされそうな気がして心配である
8	3.40(1.078)	3.17(0.891)	3.225***	決心したあとよくぐらつく
10	2.93(1.057)	2.34(0.918)	8.043***	目標が高すぎて失敗したと思うことがよくある
12	3.53(1.136)	3.16(1.090)	4.522***	ひとりで初めてのことをするのが心配である
14	3.05(1.206)	2.57(1.287)	5.144***	今、自分が本当にしたいことがわからない
16	3.19(0.993)	2.40(0.827)	11.566***	困難に直面するとしりごみしてしまう
18	2.82(1.100)	2.56(1.065)	3.272***	内気なので自分を主張できない
20	3.46(1.197)	3.40(1.056)	0.638	くよくよ心配するたちである
22	3.71(1.061)	3.28(1.040)	5.489***	うわさを気にするほうである
24	2.89(1.015)	2.48(0.920)	5.791***	自信がないのであきらめてしまうことが多い
26	2.59(1.132)	2.55(1.054)	0.607	今の自分は本当の自分でないような気がする
28	2.91(1.056)	2.44(0.997)	6.254***	自分がみじめだと感じるが多い
30	3.19(1.127)	2.52(0.985)	8.517***	ときどき自分は役に立たない人間だと感じる
	43.45(9.890)	49.96(8.918)	-9.372***	「自我確立」得点

あったのに対し、韓国の大学生では39%であり、「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」と回答した割合が、日本の大学生では7%、韓国の大学生では22%と大きな開きがあった。日本の大学生は韓国の大学生に比べて、一度与えられた仕事はいやな仕事でも最後までやるという義務感が強い。日本の大学生は社会へのコミットメントは高くないが、組織に入ると組織での役割はたとえいやなことでも最後までやるという傾向が強く見られる。この傾向が過労死などにつながるのかもしれない。

次に「自我確立」の側面について、日本と韓国の大学生を比較検討する。「自我確立」の各項目は方向が「自我確立」とは逆向きなので、方向を逆転して「自我確立得点」を求めている。したがって、表

3では「自我確立得点」が大きいほうが「自我確立」が進んでいると見なすことができる。

表3から「自我確立得点」は、日本の大学生は43.45、韓国の大学生は49.96で、韓国の大学生のほうが有意に平均点が高いので、韓国の大学生のほうが日本の大学生よりも「自我確立」が進んでいると考えられる。

表3に示した「自我確立」項目は、方向を逆転せずに採点してある。つまり「まったくあてはまらない」は1、「あまりあてはまらない」は2、「どちらともいえない」は3、「かなりあてはまる」は4、「非常にあてはまる」は5と得点化した。したがって、3以上のときは「その項目で述べられている傾向」にどちらかというにあてはまり、3未満のときは「その項目で述べられている傾向」にどちらかと

いうとあてはまらないと見ることができる。表3より、危険率1%以下で有意差があった項目について見ると、すべて韓国の大学生のほうが数値が小さく「自我確立」の傾向が強いことがうかがえる。t値の大きな両者の差が大きい項目を見ると、「仲間はずれにされそうな気がして心配である (t=12.274)」「困難に直面するとしりごみしてしまう (t=11.566)」「ときどき自分は役にたたない人間だと感じる (t=8.517)」「自分の考えを人からけなされそうな気がする (t=8.264)」「目標が高すぎて失敗したと思うことがよくある (t=8.043)」などである。

日本と韓国の大学生で大きな差が見られた項目について傾向の違いを詳しく見るために、回答分布を検討する。まず「仲間はずれにされそうな気がして心配である」への回答を日本の大学生と韓国の大学生で比較したのが、図8である。「非常にあてはまる」「かなりあてはまる」と回答した割合が日本の大学生では30%であったのに対し、韓国の大学生では8%と約4分の1である。「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」と回答した割合が、日本の大学生では38%、韓国の大学生では76%と2倍もの開きがあった。韓国の大学生では1割にも達していないのに、日本の大学生の場合3割も仲間はずれへの不安を感じているのは、小学校以来のいじめ問題が関連しているものと考えられる。

次に「困難に直面するとしりごみしてしまう」への回答を日本の大学生と韓国の大学生で比較したのが、図9である。「非常にあてはまる」「かなりあてはまる」と回答した割合が日本の大学生では43%であったのに対し、韓国の大学生では9%と約5分の1である。「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」と回答した割合が、日本の大学生で

は26%、韓国の大学生では58%と2倍以上の開きがあった。子どもになるべく失敗をさせないようにという環境の中で成長してきた結果、失敗経験が少なく困難耐性が弱い子どもが増加しているように思われる。森口はいじめ対策として、「規範の内面化」と「いじめ免疫の獲得」ということを述べている(森口, 2007, P176)。困難耐性が強くなれば、仲間はずれへの不安も小さくなると考えられる。

さらに「ときどき自分は役にたたない人間だと感じる」への回答分布を日本の大学生と韓国の大学生で比較したのが、図10である。「非常にあてはまる」「かなりあてはまる」と回答した割合が日本の大学生では42%であったのに対し、韓国の大学生では16%と5分の2以下である。「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」と回答した割合が、日本の大学生では28%、韓国の大学生では49%と2倍弱の開きがあった。日本の大学生は半数近くが自分は役にたたない人間だと感じるということはあることは、自己効力感が十分に形成されていないことを示唆している。以上から、日本の大学生は韓国の大学生と比較すると、「自我確立」の面で発達が不十分であると考えられる。

日本の大学生について韓国の大学生と比較しながら見ていくと、自我同一性形成の問題点が浮かび上がってくる。「社会性確立」の面では、「将来に希望をもっている」と回答した割合が半数弱であり、韓国の8割強に比べるとかなり少ない。将来に希望がもちにくい日本の状況が「社会のためにつくそうという気持ちが強い」と回答する割合の低さをもたらしているように思われる。しかし、ひとたび組織に属すると半数以上が「いやな仕事でも最後までやりとおす」と回答しており、社会に出てからの精神衛

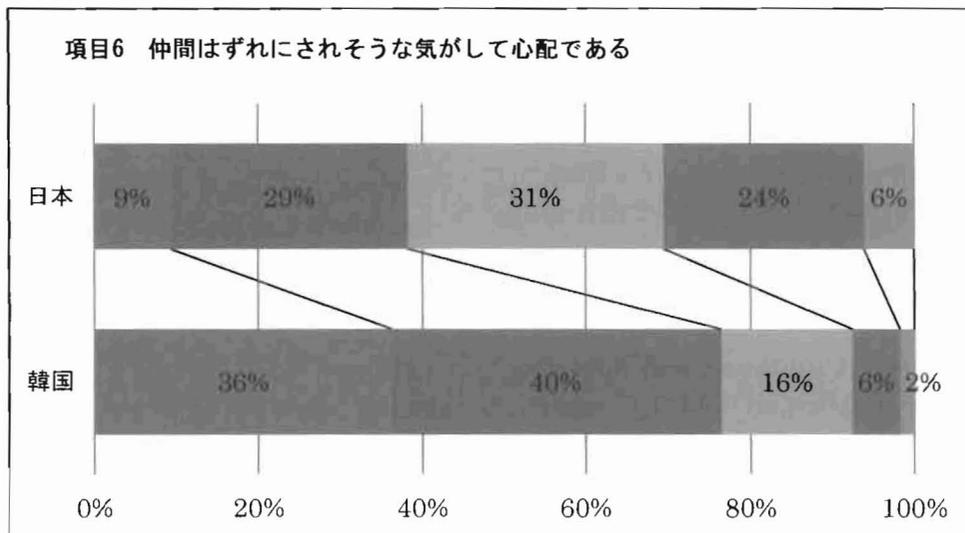


図8 日韓大学生の「仲間はずれにされそう」の割合

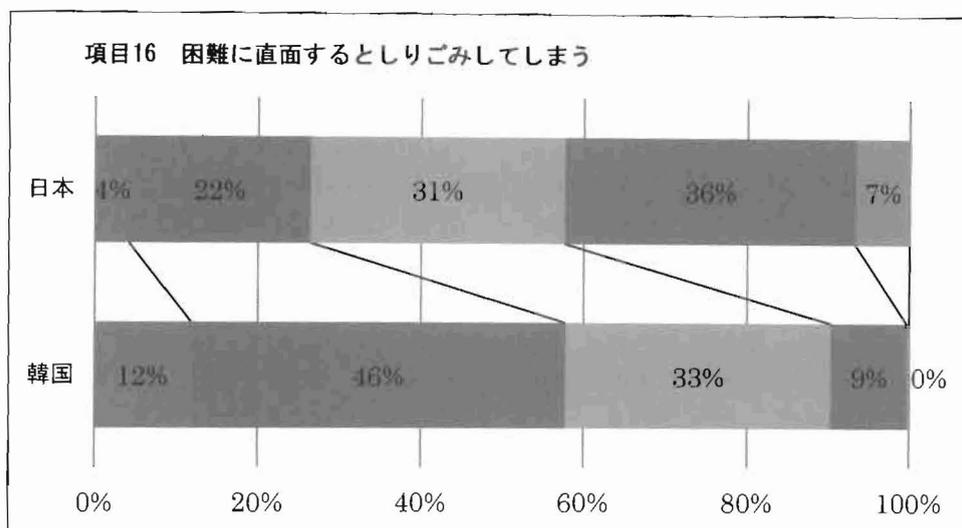


図9 日韓大学生の「困難にしりごみ」の割合

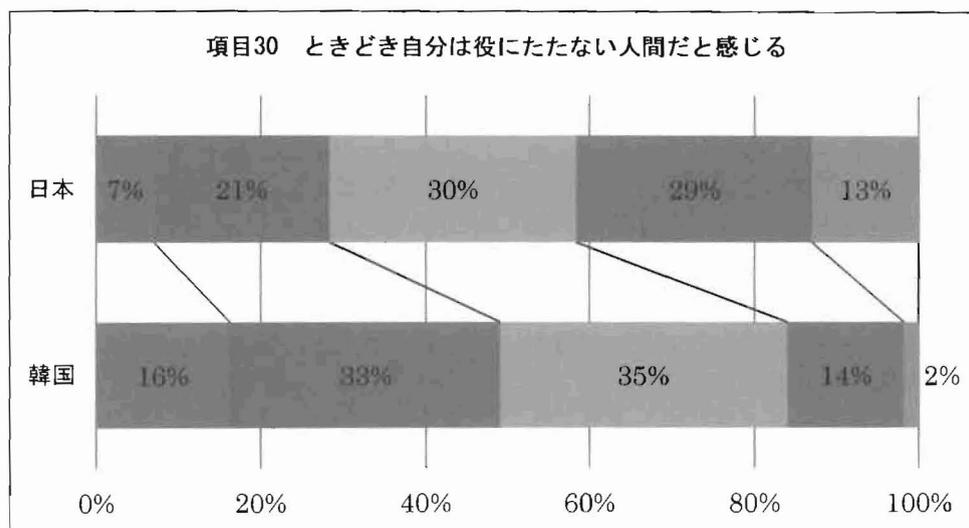


図10 日韓大学生の「自分は役にたたない人間だ」の割合

生に問題が生じる恐れがうかがえる。「自我確立」の面では、困難耐性が弱く自己効力感が不足しており自立が不十分である点が問題である。日本では大学生といっても、親の保護の元に大学に通っている人が大半であり、経済面だけでなく心理面でも自立が十分にはなされていないのが現状である。大学生活の中で、学習、サークル活動、アルバイト経験などを通して、自分の「社会性確立」と「自我確立」を進めていくことが、現在の日本の大学生にとって大きな課題である。

引用文献

Erikson, E.H. 1963 *Childhood and Society*, Second Edition Revised and Enlarged. W.W.Norton & Company, Inc. (幼児期と社会 I, 仁科弥生訳 みすず書房 1977)
 水野正憲 1998 自我同一性の型を測定する質問紙「自我同一性パターン尺度 IPS」の検討 岡山大

学教育学部研究集録第107号 151-158
 水野正憲 1999 「自我同一性パターン」の検討(1) 対人関係・規範意識・進路意識との関係 岡山大学教育学部研究集録第110号 87-82
 水野正憲 2000 「自我同一性パターン」の検討(2) 幸福感および自己受容との関係 岡山大学教育学部研究集録第114号 11-17
 水野正憲 2001 「自我同一性パターン」の検討(3) 時間的信念・時間イメージとの関係 岡山大学教育学部研究集録第118号 157-161
 水野正憲 2003 「自我同一性パターン」の検討(4) 不安および交流分析の自我状態・透過性調整力との関係 岡山大学教育学部研究集録第123号 165-169
 水野正憲 2006 「自我同一性に関する日中大学生の比較」 岡山大学教育学部研究集録第133号 47-55
 森口朗 2007 いじめの構造 新潮社
 山田昌弘 2004 希望格差社会 筑摩書房